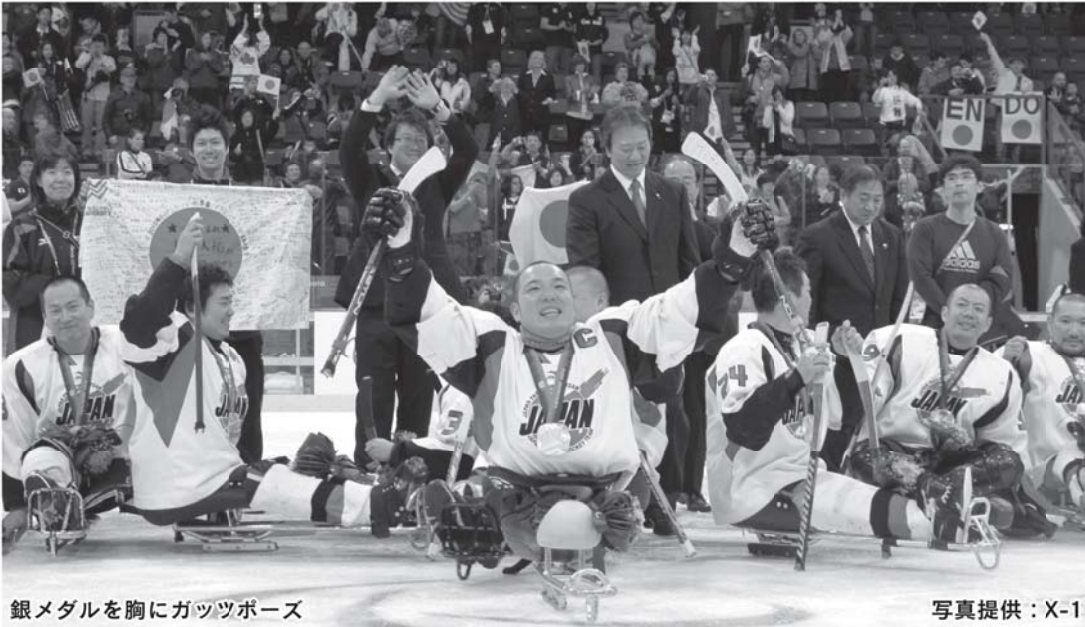


ま
と
ひ
ち

努力の結晶

銀メダルおめでとう！



銀メダルを胸にガッツポーズ

写真提供：X-1

写真上段左＝同僚が作ってくれた横断幕と一緒に、記念撮影

写真上段右＝開会式で旗手を務める



決勝のアメリカ戦で果敢にゴールを攻める

写真提供：X-1

日本中を感動の渦に巻き込んだ、バンクーバー冬季パラリンピック。アイススレッジホッケーで日本初の銀メダルを手にした日本代表。主将を務めた遠藤隆行選手（川越市職員）に話を聞きました。

「ついに、やったぞ！」。強豪カナダに勝ったときの気持ちを、興奮した口調で話してくれました。過去2回のパラ

リンピックは、いずれも5位。大会前、あえて自分にプレッシャーをかける意味で、メダルを取ることを公言しました。「だめかもしれない……」。そんな気持ちを前向きに変えたのは、仲間の結束と周囲の応援。メダルを手にしたときは、その重さ以上のものを実感しました。

遠藤選手は、生まれつき両足がありません。普段の生活は、車いすを使用しています。「障害は、個性のひとつ。苦とは思いません。何でも、やってやれないことはないと思っています」。その証しに、富士山に単独で登ったことも。アイスホッケーのグローブに靴底の補修材を貼り付け、オリジナルの道具を作成。一緒に登ろうと仲間を誘いましたが、無謀と断られてしまいました。「無理と言われたら、逆にやる気が湧いてくるんです」。言葉に、決めたことをやり遂げる芯の強さを感じられます。

障害を克服し、パラリンピック精神を反映して活躍した、男女各一人の選手に贈られる「ファン・ヨン・デ功績賞」を日本人として初めて受賞。「自分たちの頑張りで、障害者スポーツに対する意識を少しでも変えていけたら」と遠藤選手。

「次は、子供たちに自分の経験を話したい。目標を持つ大切さと、どんな障害にも、あきらめずに向って行く強い心が、夢を引き寄せてくれることを伝えたい」と熱く語ってくれました。

市は、市民の誇りとなる功績をたたえ、3月29日、遠藤選手に川越市民栄誉章を贈りました。



職務に励む遠藤選手

資源化センターが竣工



こんな工夫が大切なのね

3月28日、熱回収施設・リサイクル施設・草木類資源化施設など複数の施設からなる資源化センターが竣工しました。環境プラザ(つばさ館)では、古くなっても工夫しだいで使えるものを探したり、再利用できる瓶の種類を説明したりするコーナーで、楽しく学ぶ親子の姿が見られました。

子供たちが作るミニ川越



アナウンサーに挑戦!

3月13・14日、連馨寺境内で開催された「子ども大学かわごえ学園祭」。参加者は、「住民登録」後、ミニ川越内の放送局や飲食店などで働き、給料をもらいます。その後、納税、買い物という実社会を模擬体験しました。「働いてお金をもらうって、楽しいですね」と松田明日美さん(8歳・古谷上)。

ひま
ち

ふ
お
と
こ
こ
ろ

ひま
ち

行って 会って 体験
気になるイベントや人を紹介

小江戸あるき

ひま
ち



スタートを切る河合さん



二人は、アジア選手権の前に、川合善明川越市長を訪問しました。スケート靴を持参した河合さんは、抵抗を少なくするため、スピードスケートより刃が薄くなっているなどを説明。「頑張ります」の言葉どおり、初めての国際大会出場で、千五百メートル四位入賞と健闘しました。次のオリンピックでは、代表選手となって活躍している姿が見られるかもしれませんね。

で、三連覇を果たした実力の持ち主。「競技中の追い越しは、いつでもできますが、前の選手を押し下り、引っ張ったりすると失格です。競技の展開を読む能力も大切です」と渡辺さん。今回の五百メートルでは、二位に輝きました。

3月13・14日、相模原市で行われた国際試合、アジアショートトラック選手権に渡辺啓太さん(18歳・上野田町)、河合奏聖さん(19歳・川鶴二丁目)が出場しました。直線二十八・五メートル、カーブの半径八メートル、一周が百十一・二メートルのだけのトラック。この狭く短いコースを四人から六人で滑走し、着順を競います。直線での瞬発力やコーナーを早く抜ける技術力だけでなく、相手とのかけ引きやゴール前の競り合いが、勝負を分ける大きなポイントです。渡辺さんは、国体の少年男子千メートル

アジアショートトラック選手権で健闘



コーナーで追い越しをかける渡辺さん(左)